

自治医科大学附属病院 連携協働コラムがスタートします

高齢化が進み、医療へのニーズが高まるなか、毎日大勢の患者が自治医科大学附属病院を訪れます。

しかし、あたりまえのように利用する同病院について、あまり知る機会がありません。

「スタッフって何人いるの？」

「現場から見る医療の問題は？」

市では同病院との連携をさらに深め、医療と行政の分野で協働が進められるよう情報・意見交換などを行っています。

「もっと自治医科大学附属病院を知って欲しい。」という市と病院の思いから、同病院と市との連携協働により、現場の目で様々な角度から見た医療について、同病院のスタッフによるコラムをスタートすることになりました。

設立までの歴史

旧南河内町の町史をひも解くと、自治医科大学及び同附属病院の設立は決して平坦なものではなかったようです。

設立から40年が経つ自治医科大学附属病院の歴史の概要をご紹介します。

昭和46（1971）年、栃木県で誘致活動を行っていましたが、医療

関係者は交通の便の良さから所沢市を希望していました。しかし所沢市が誘致先として考えていた米軍通信基地の返還見通しが立たなかったことから、自治省（現総務省）は所沢市を断念し本県への設置へと動きました。

病院建設で大きな問題は、看護師の確保だったようです。看護師不足は全国的な問題で、看護学校の設立などの対応がとられました。

また、同年5月に獨協医科大学の起工式が行われたことなどから、地域の医師から、「地域の患者と看護師が吸収され、生活がおびやかされる。」との反発がありました。

多くの課題を解決しながら、昭和47年4月に大学の開学式、昭和49年4月に病院の開院式が行われ診療が開始されました。

大学の開学式で最後にあいさつに立った横川知事は、次のような印象深い挨拶をしています。

「自治医大が建設された薬師寺は1300年前、下野薬師寺として数千人の僧が集まり、薬草が栽培され民間医療に当たっていた。その土地に自治医大が建設されたことは因縁浅からぬものがある。」

（参考資料：南河内町史 通史編 近現代）

広報しもつけに寄せて

自治医科大学附属病院 病院長 安田 是和

3週間前の大雪もやっと消え、春が待ち望まれるこの頃です。下野市の市民の皆様には、お元気で過ごすごしの事とお慶び申し上げます。

さて自治医科大学附属病院は、今年開院40周年を迎えます。下野市および市民の皆様にはこの間、自治医大附属病院を暖かく見守って頂き、深く感謝を申し上げます。この度、市民の皆様と当院との理解をお互いに深めるため、当院のスタッフが執筆させて頂くことになりました。大変意義深く、どうぞ宜しくお願いいたします。

自治医科大学附属病院について
さて、当院は1132床（ベッド数）を有する大学附属病院であり、大きな特徴としては、日本で唯一、小児病院である「とちぎ子ども医療センター」が併設されている大学病院であることがあげられます。診療科目は40科あり、高度な医療を提供する



自治医科大学附属病院 病院長 安田是和

とともに、自治医科大学の建学の理念である、地域医療に従事する医師を養成するという使命のもとに、医学生や、全国の多くの大学の出身者からなる若い研修医、看護師、薬剤師など医療系全職種の教育を行う教育病院でもあります。

救急医療は、救命救急センターを擁し、いわゆる3次救急医療（最も重症な患者を扱う救急医療）を担当している病院でもあります。一日外来患者数は2700名、年間手術件数は約9000件を施行している症例数の多い大学病院でもあります。

また子ども医療センターには、遠くから入院するご家族の滞在施設として、善意と寄附により運営される財団によって「ドナルド・マクドナルド・ハウスとちぎ」があり、病気のお子さんの治療をご家族が支援する施設と環境が整っています。

病院の理念は、（1）患者中心の医療（2）安全で質の高い医療（3）地域に開かれた病院（4）地域医療に貢献する医療人の育成であり、地域の医療機関と密接に連携し、患者さんの健康に貢献できる事を目標としています。

「かかりつけ医」の大切さ

皆様ご存知のとおり、日本はいま